

所蔵資料紹介 : *Les Français peints par eux-mêmes : encyclopédie morale du dix-neuvieme siècle* (『フランス人の自画像 — 19世紀風俗百科 —』)

1. 19世紀のパリ モダン都市パリ

産業革命に伴い、19世紀のフランス、とりわけパリは目覚ましい発展を遂げていました。蒸気機関の船や列車が普及はじめ、街にはガス灯がとりました。上流貴族は流行のファッションをまもってはオペラ座へと集い、パリで生まれたモードは地方へと飛び火して憧れの的となったのです。モードの発信地・パリへの人口集中は止むことなく、常にさまざまな人々と新しい話題で溢れかえっていました。

一方で、19世紀は報道に大きな変化を迎えた時期でもありました。「1814年の憲章」により報道は厳しい監視の目から解放され、日刊新聞など大衆を相手にした多くのメディアが登場しました。そして、印刷術の進歩により大量に刷られるようになった新聞や雑誌は、モダン都市パリの風景や流行、風俗など、その日その時の目新しい話題を詰め込んで世間をにぎわせていました。新聞の連載小説を読んだり、女性がファッション誌に夢中になったり、ゴシップ誌に好奇心をくすぐられたりという原型はこの時代に形づくられたのです。

2. 『フランス人の自画像』

最大にして最高の風俗観察文集

なかでも、*Les Français peints par eux-mêmes : encyclopédie morale du dix-neuvieme siècle* (『フランス人の自画像 19世紀風俗百科』)は、当時の社会風俗を描写することを目的として、1839年末から1842年にわたり高級挿絵本の出版社キュメール社により刊行されました。全9巻の中には、学生・貴婦人・警察・レスラー・徒刑囚など様々な階層や職業の人々の人物典型が挿絵と共に記されています。当時は、10ページ弱のテキスト(本文)に別刷りの挿絵が1枚ついたセットでパリ編・地方編毎週各1部ずつ配本されました。合計422冊にも及んだものを持ち主が後で自分の趣味嗜好に合わせて製本したのです。

バルザック、ノディエ、ゴーチエらの作家によるテキストは、時に辛辣ながらも精彩に富んでおり、網羅的かつ体系的に当時の風俗を語ります。さらに、挿絵を手がけたガヴァルニ、グランヴィル、ドーミエら画家の腕のよさもさることながら、彫り師・刷り師・彩色工の技術から顔料・高級紙の



品質にいたるまで、いずれ劣らぬすばらしさなのです。これが、19世紀に刊行された最大にして最高の風俗観察文集とされるゆえんなのでしょう。

3. 弁護士より優雅な代訴人

では『フランス人の自画像』の中で当時の人々はどう紹介されていたのでしょうか？ 弁護士を例に見てみましょう。ここにあげたのは弁護士と代訴人の挿絵です。



代訴人(第1巻)



弁護士(第2巻)

当時のフランスでは、現在の弁護士の仕事を、職域によって弁護士と代訴人が分けて担っていました。法廷での弁論は弁護士が、訴訟手続は代訴人が行っていたのです。さて、どちらが儲かっていたのでしょうか？

それは、両者の挿絵にもあらわれています。弁護士は黒づくめの法服で弁論をしている姿ですが、かたや代訴人は美しく高級そうなガウンをまもっています。

というのも、代訴人がより多くの依頼を受けるためには、優雅で裕福な雰囲気をかもし出す必要があったからです。代訴人は面談に訪れる訴訟依頼者を自らの書斎でもてなします。依頼者が書斎の扉を開けると、贅を尽くした書斎の中に美し

関連する本学所蔵資料 ~機会があればあわせて読んでみてください~

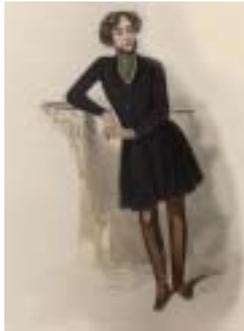
『フランス人の自画像』について ⇨ 『職業別パリ風俗』 両校地図書館開架 382.35 K586
19世紀パリのメディアについて ⇨ 『メディア都市パリ』 今出川図書館開架 235.06 Y2

所蔵：ラーネッド記念図書館書庫

請求記号：	本編（パリ編）全5巻	382.35	F9557	1：1～1：5
	Province（地方編）全3巻	382.35	F9557	2：1～2：3
	Prisme（付録）1巻	382.35	F9557	S



名流夫人（第1巻）



ダンディー（第3巻）



法学部の学生（第1巻）



レスラー（Province第1巻）



乳母（第1巻）

いガウンを着た代訴人がおだやかに座っているのです。依頼者はその雰囲気にも幻惑され、代訴人の人当たりのよさからすっかり信頼を寄せてしまいます。本書の中にも「贅沢な書齋は、代訴人が依頼者と出会うのを助ける」(アルタロッシュ)と記されています。こうして依頼者の信頼を得た代訴人は、複雑な訴訟手続をして多くの手数料を請求し、財をなしていきました。

一方、弁護士はというと、それなりの収入はあったものの、身を立てていくにはなかなか大変だったようで、その様子は『ペール・ゴリオ』で法科大学生ラスティニャックに対して、悪党ヴォートランが語る台詞からも伺えます。

「ラスティニャック男爵殿は弁護士がご希望かね？いいだろう。それにはまず、十年間食うや食わずの生活をしながら、いっぽうでは毎月1000フランも浪費し、立派な書庫と事務室まで設けてなければならない。それから社交界に顔を出し、訴訟を回してもらうために代訴人の部屋着の裾にキスして、裁判所の床をなめなきゃならん。」(鹿島茂訳『ペール・ゴリオ』[バルザック「人間喜劇」セクション第1巻]【今出川図書館開架 953 B283 1】)

ここから、代訴人に媚を売り、這いつくばるようにして仕事をしていた弁護士の姿が見てとれます。

ため、「持ち主仕様」に仕上げられています。つまり、表紙を省いてしまっていたり、自分の趣味や信条にあわない部分は取り除いてしまったり、といった具合です。とりわけ、反ナポレオン主義者が持ち主だった場合は、ナポレオンの肖像画を取り除いてしまっている場合もあるのです。このように、最初に装丁した持ち主の違いによって、少しずつ異なったいろいろな『フランス人の自画像』が生まれることとなりました。なお、本学所蔵資料の持ち主は、とりたてて政治的思想を持っていなかったのか、几帳面だったのか、表紙もナポレオンの肖像画も入れたままで装丁しているようです。



ナポレオン（第5巻）

4. 本学所蔵の特装版について

『フランス人の自画像』には、白黒版と手彩色版とがあります。その手彩色版にも、単に手彩色しただけのものと、色彩が変色しないよう特別にゴム糊の上塗りを施したものと2種類があり、本学所蔵の資料は後者です。

また、先に記しましたように本書は持ち主が製本している

人間百科ともいべき『フランス人の自画像』を通して、19世紀フランスの彩なす社会風俗と人間模様を、みなさんも是非一度のぞいてみてください。

禁帯出図書のため、館外貸出はできませんが図書館内で閲覧できます。ラーネッド記念図書館のメインカウンターへお申し出ください。

メディアにみる19世紀フランス文化について ⇨

『19世紀フランス愛・恐怖・群衆 挿絵新聞「イリュストラシオン」にたどる』

19世紀文学にみる服飾について ⇨ 『バルザック「人間喜劇」ハンドブック』

両校地図書館開架 235.065 O369

今出川図書館開架 953 B283 S1